





谷崎潤一郎文庫

前科者 人面疽
金と銀 途上 私
或る調書の一節
他六篇

六興出版

LEO



Vitality · Control ·

Originality ·

Jul 24



Orange ·

Fiery ·

Aug 23 · Sun ·

Heart ·

Ruby ·

谷崎潤一郎文庫

八八〇円

第五卷 途上・人面疽・私

昭和四十八年七月十五日 発行

著者 谷崎潤一郎

発行者 吉川文子

印刷 大日本法令印刷

製本 手塚製本

発行所 六興出版

東京都文京区水道二一九―二

郵便番号 一一二

電話〇三(九四三)三四三一

振替 東京九二四四八

© 1973 MATSUKO TANIZAKI, Printed in Japan.

落丁・乱丁の本はお取り替え致します

0393-02405-9216

目次

ハッサン・カンの妖術	三
前科者	三九
人面疽	七
金と銀	九
白昼鬼語	一六三
柳湯の事件	二三九
途上	二五二
私	二七二

AとBの話

検閲官

或る調書の一節

或る罪の動機

注解

解説

監修

野谷
村崎
尚松
吾子

二八七

三三九

三七七

三七三

三八五

三九五

ハッ
サン・
カンの
妖術

今から三四十年前に、ハッサン・カンという有名な魔法使いが、印度のカルカタに住んでいて、土地の人は無論のこと、あの辺を旅行する欧米人の驚異の的になっていたことは、予もかねてから話に聞いて知っていた。しかし、予が彼に就いてやや詳細な知識を得るに至ったのは、つい近頃で、ジョン・キャメル・オーマン氏の印度教に関する著書の中に、この魔術者の記事を見出したからである。

この書の著者は、かつてラホールの大学に博物学の教授を勤め、印度の宗教や文学や風俗に就いて、数種の著述を試みた人であるから、その云うところは十分に信頼するに足りると思う。著者はハッサン・カンのことを、先ず次のように書き出している。——

Some thirty years ago, or thereabouts, Calcutta knew and took much interest in one Hassan Khan, who had the reputation of being a great wonder-worker, Several European friends of mine had been acquainted with Hassan Khan, and witnessed his performances in their own homes. It is directly from these gentlemen and not from Indian sources, that I derived the details which I now reproduce.

オーマン氏は、欧羅巴人の目撃した妖術の実例を、二つ三つ列挙した末に、ハッサン・カンが自ら人に語ったという言葉を引き、彼が神通力を体得するようになった由来を述べている。伝うるところによると、この妖術者は生れながらにそのような力を持っていたのではなく、少年の頃はただ平凡な、一箇の回教の信徒であったが、ある日偶然、自分の村にさまようて来た印度教の僧侶に見込まれて、術を授かったのだという。僧侶は最初、ハッサン・カンに極めて厳格な四十日の断食を課し、さまざまな禁厭の方法や呪文の唱え方を教えた後、とある山陰の洞穴の前に連れて行って、窟の中にあるものを見て来いという命令を下した。——“With much trepidation I obeyed his behests,

and returned with the information that the only thing visible to me in the gloom was a huge flaming eye.”——彼はその時のことをこう話しているが、物凄く、真暗な洞穴の奥には、一箇の、爛々と燃え輝く巨大な眼球が見えたのである。すると僧侶は、「それでよろしい。もうお前には神通力が備わっている。」と宣告して、試みに大道の石ころに向って一つ一つ印を結ばせた。そうして更にこう云った。「まあこれから家へ帰って、お前の部屋の戸を締めて

おいて、この大道の石ころを運んで来るように、お前の眷属に命令して見るがいい。お前には人間の眼に見えぬ眷属が附いていて、いつでもお前の用を足すのだ。」——ハッサン・カンが云われるままに家へ帰って、自分の部屋の戸を閉じて、口の内で眷属に命令を云い渡すと、その言葉がまだ終るか終らぬうち、彼は不思議にも、例の石ころが忽然と自分の足元に横たわっているのを発見して、云い知れぬ恐怖と驚愕とに打たれたという。

以上の話でも分るように、彼の魔法は主として彼の影身に添うているあるスピリット、即ちジン(djinn)と称する魔神の眷属が媒介となるのであった。しかもこのジンは、必ずしも彼に対して常に柔順な家来ではなく、どうかするとその命令に腹を立てたりするらしかった。現に、オーマン氏の知っている四五人の欧羅巴人が、ある時彼とともに食卓を囲みながら、この場へ直ちに一壇のシャパンを出して見ろという注文を、冷やかし半分に提出したことがあった。彼は冷やかされたのが癪に触ったのか、ひどく興奮した調子で、何やらぶつぶつとしゃべっていたが、やがて憤然と席を離れてヴェランダに立ち、虚空に向って声を荒らげつつ二たび三たび命令を伝えた。すると三度目の言葉が

終るや否や、空中からシャパンの壇がつぶての如く飛んで来て、鋭い勢いでハッサン・カンの胸に中り、床に落ちて粉微塵に砕けてしまった。

「どうです。これで私の魔法の力が分ったでしょう。しかし私はあまり性急に云いつけたので、ジンを怒らせてしまったのです。」

と、彼はその折一座を顧みて、息を弾ませながら云った。

まだこの外にも、オーマン氏は彼に関する奇怪な逸話を紹介しているが、予は今ここで、それを読者に取り次ぐとするのではない。予がこの小説の中で、特に諸君に語りたと思うのは、近ごろハッサン・カンの衣鉢を伝えた印度人が、わが日本へやって来て、しかも東京に住んでいること、並びに予がその印度人と懇意になって、親しく幻術を実験したことである。それを諸君に話す前にあらかじめ諸君の好奇心を唆しておく必要から、予はただちよいと、オーマン氏の著書を引用したに過ぎないのである。

予が初めてあの印度人に会ったのは、たしか今年の二月の末か三月の上旬であつたらう。ちょうど中央公論の四月の定期増刊号へ、玄舛三蔵の物語を寄稿することになって、そろそろ執筆しかけている時分であつた。ある日の朝、予

はあの物語を書くために、アレキサンダー・カニンハム氏の印度古代地理とヴィンセント・スミス氏の「玄奘の旅行日誌」(The Itinerary of Xuan Chwang)とを調べたくなって、上野の図書館の特別閲覧室へ出かけて行った。その折、予は予の隣りに席を占めて、英語の政治経済の書籍を傍に、堆く積み上げたまま、熱心に読書している一人の黒人を見たのである。勿論当時の予は彼に就いて格別の注意を払わなかったが、たまたま予の繙いているものが印度に関する書冊であったために、彼の方では多少の好奇心を起こしたらしく、予の風采や挙動などを、しきりにちらちらと偷み視るような様子であった。予はそれから暫らく図書館に通って、毎日朝の十時頃から午後の二時頃まで、相変らず印度古代の地理や風俗を調べていると、例の印度人も必ず近くの椅子に陣取って、時々何か話しかけたそうに、じっと予の方を見詰めているらしかった。年配は三十五六かと思われる、小太りに太った、やや背の低い体格の男であった。豊かな漆黒の髪を綺麗に分けて、いつも紺羅紗の背広服を着て、一日は暗緑色のネクタイにラッキ・ビーンのピンを飾り、他の日には黄橙色の羽二重のネクタイにブラックストーンのピンを刺していた。とにかく、その

服装はあまり上品な感じを与えなかったにも拘わらず、そのでっぶりの円顔の中にある、冴えた大きな瞳と、濃長い眉毛と、厚い唇の上に伸びている八字髭と、それから小鼻の両側に刻まれた深い皺とは、エジプトのプリンスが所蔵しているという中世印度の肖像画の、タメルランの容貌に髣髴とした趣があつて、一種の威厳と柔和とを含んでいるように思われないでもなかった。

予は二日目あたりから、いつかこの印度人と懇意になつてしまふような、ぼんやりした期待を抱き始めたが、しかし三日目までは別段そういう機会もなく済んでいた。ところがちょうどその日の朝のことである。特別閲覧室に隣接している目録室の、欧文のカード・キャタログの「Indian mythology」の部の引き出しを開けて、予が専ら「Indian mythology」の参考書を漁っていると、例の黒人は其処から少し隔たつた「R……」の部の引き出しを開いて、何か書物を捜し求めているらしかった。予はその咄嗟の間に彼が「R……」の中で調べているのは「Revolution」の項ではなからうかと思つたりした。———そう思つたのは、多分彼が印度人であつて、この間から重に政治経済の書を読んでいることを、うすうす知っていたせいであらう。———

するとやがて、彼は「R……」の引き出しを閉じて「……」を開いた。予はまたその時も「Politics」もしくは「Political economy」の文字を聯想せられた。彼は幾冊かの書物の名を、鉛筆で紙片へ書き留めながら、間もなく更に「P……」を閉じて「K……」に移り、アルファベットの順に並んでいる目録の引き出しを、次第に逆に遡^{さかのぼ}って、だんだん「I……」の方へ近づいて来るのであった。そうしてしまいいには予と擦れ擦れになつて、現在予が手をかけている筐^{かた}の中、しかも同じく「Ind……」の部分で覗^{のぞ}き込むようにしながら、極めて突然、「私もこのケースの中に見たいものがあるのですが、あなたは何をお調べになりますか。」というような言葉を、もう少し拙^{ちやく}い日本語で話しかけた。「私もこの「Indian mythology」のところを調べていますが、大分手間がとれますから何卒^{どうぞ}お先に御覧なさい。」予はこう答えて目録から首を擡^あげた際に、眼の前に立っている印度人の、鼻端^{びばな}の両側の窪^{くぼ}んだ所が、さながら煤^{すす}が溜^{たま}つたように真黒であるのを見つけ出して、すこぶる奇異に感じたことを覚えてゐる。

「ああそうですか。私は Industry のところをちょいと見

せてもらえばいいのです。じきに済みますから、ちょいと私に貸して下さい。」

彼は「ちょいと」と云う度^{たび}ごとに、にこにこしながら軽く頭を下げて、その引き出しを譲^{たづ}り受けた。

こんな出来事が縁になつて、それから一日二日の間に、二人はとうとう懇意になつてしまつたのである。予は最初彼が印度人であることに興味を感じて、一時の好奇心から附き合つてゐるに過ぎなかったが、だんだん話をして見ると、思ひの外に多方面な趣味と知識があるらしかった。殊に驚いたのは宗教や美術に関する造詣^{ぞうけい}の深いことで、予が印度古代の建築や風俗を知るために、適当な参考資料はないかと云うと、彼は言下にデヴィス、カニンハム、フウシエなどの著書の名を五つ六つすらすらと挙げて、予を少からず煙^{けむ}に巻いた。何でも生れはパンジャブのアムリツアルで、婆羅門教^{ばらもんきやう}を奉ずる商人の息子^{むすこ}であるが、四十年前に、高等工業学校へ入学する目的で日本へやって来たのだと云つた。

「しかしあなたは、先日政治経済の本をしきりに読んでいましたね。」

予がこういつて不審がると、彼は言葉を曖昧^{あいまい}にして、

「なあと別段、政治経済と限ったことはありません。私は何でも手あたり次第にいろいろのものを読むのです。――

――実は高等工業学校の方を去年卒業してしまったのですが、印度へ帰っても面白いこともありませんから、こうしてぶらぶら遊んでいます。一つ日本の文学でも研究して見ましようかね。」

などと、いかにも閑人らしい口吻を弄する様子が、どこことなく普通の留学生と違って、事によったら「印度の独立」を念頭に置く憂国の志士ではあるまいかと、思われるような節もあった。

もう一つ、彼に就いて意外に感じたのは、互いに名乗り合う以前から、彼があらかじめ予の名や職業を心得ていたことである。

「ああ、そうですか、あなたが谷崎さんですか。私はあなたの小説を読んだことがあります。」

と、彼は云った。聞けば宮森麻太郎氏のリブレゼンタティブ・テエルズ・オヴ・ジャパンを繙いた時、巻頭に載っていた英訳の「刺青」を非常に面白く読んだので、それ以来「タニザキ」という名を覚えていたのだそうである。

「――それで分りました。あなたは今度、何か印度の物

語を書くこうとしているのでしょうか。この間から印度のことを大変委しく調べているから、私は妙だと思っていまして。失礼ですが、あなたは印度へいらしたことがあるのですか。」

予が「いいえ」と答えると、彼は眼を円くして、詰るような口調で云った。

「なぜ行かないのです？ この頃は宗教家や画家が盛んに日本から出かけて行くのに、あなたは どうして行かないのです。印度を見ないで印度の物語を書く？ 少し大胆過ぎますね。」

予は彼に攻撃されて、耳の付け根まで真赤にしなが、慌てて苦しい弁解をした。

「私が印度の物語を書くのは、印度へ行かれないためなんです。こう云うとあなたに笑われるかも知れないが、実は印度に憧れていながら、いまだに漫遊の機会がないので、せめて空想の力を頼って、印度という国を描いて見たくなったのです。あなたの国では二十世紀の今日でも、依然として奇蹟が行われたり、ヴェダの神々が暴威を振ったりしているというじゃありませんか。そういう怪しい熱帯国の、豊饒な色彩に包まれた自然の光景や人間の生活が、私には

恋しくて恋しくてたまらなくなったのです。それで私は、あの有名な玄葬三蔵を主人公にして、千年以前の時代を借りて、印度の不思議を幾分なりとも描いて見ようと思ったのです。」

「なるほど、玄葬三蔵はいい思い附きですね。いかにもあなたが云うように、印度の不思議は二十世紀の今日でも、玄葬三蔵が歩いた時代とあまり違つてはいないでしょう。私の生れたパンジャブの地方へ行けば、科学の力で道破することのできないような神秘的出来事が、未だにほとんど毎日のように起こっています。……」

二人がこんな話をしたのは、天気の良いある日の午後、昼飯を済ませて図書館の裏庭を散歩している折であつた。前にも云つたように、それほど日本語の巧みでない彼は、少し込み入つて来ると知らず識らず英語を交えて、ブライアのパイプを握つた右の手頸を上げ下げしつゝ、静かな、しかし力のある語気で云つた。

予の好奇心はその時より盛んになった。あたかも玄葬三蔵の物語を書くかとしてゐる際に、この印度人と相知るようになったのは、願うでもない仕合わせである。彼の故郷のパンジャブ地方に、現在行われつつある不思議という

のは如何なることか、予は直ちに質問を試みないではいられなかつた。

「神秘的な事件というと、たとえばどんなことでしょうか。参考のために伺いたいと思いますが、……」

予はこう云いかけて、ふと、彼の顔色を窺つたが、まだ何かしら云いたいことがあつたにも拘わらず、それぎり次ぎの言葉を出さずに、黙つて凝視をつづけるべく余儀なくされた。なぜかという、今まで機嫌よくしゃべつていた彼の相貌が、予の質問を発する瞬間に恐ろしく變つてしまつたことを発見したからである。彼は火の消えかかつたパイプを口に啣えたまま、南向きの、日あたりのいい樹に凭れて、両腕を固く組んで俯向きながら、上眼づかいにじつと一方を眺めている。——その眼はいつの間にか、眉毛の下、深く窪んでいた眼窩の中に這入り切らぬほど、大きく一杯に押し拡がって、黒眼と白眼との境界がくつきりと分るように冴え返つていた。その眼は、陰翳というものの特徴もない、西洋料理に使う磁器の皿のような地色と硬さを持つ眼であつた。真白な西洋紙のまん中へ濃い墨の斑点を打つたような、全く潤おきのない、鋭い光というよりも底気味の悪い明るさを持つ眼であつた。そうして何処か

遙かな所で聞える物音に注意を凝らすが如くであった。また額には、上眼を使っているために、太いだぶだぶした皺が重畳として起伏していた。予はその皺の夥しい数と逞ましい波状とに就いても、普通の人の額に刻まれるものとは非常に違っていることを看取せずにはいられなかった。要するに全体の表情が沈鬱、恍惚、悔恨、などのいづれをも含んでいるような、いづれとも異なっているような、一見してはなはだ奇異の感じを抱かせるものであった。

彼の怪しい瞳は、予が呆然として彼の姿を睨み詰めている間、遂に一遍も予の方へ注がれなかった。予はそれでも、あまり長く沈黙するのを不自然であると悟ったので、暫らくしてから、

「ねえ、どうでしょう、その話を私に聞かせてくれませんか。」

と、遠慮深く尋ねて見た。

すると、遠くを眺めていた彼の瞳は、やがてぐるりと眼窩の中で一廻転して、予の方へ向けられたが、それは予の顔に注意するというよりも、以前の物音が予の顔の中に聞えるのであるらしかった。しかも依然として上眼を使ってい

て、例の額の皺の数は、洗い出しの木目の如く、微動だもする様子がない。

「……………ねえ、どうでしょう。その話を……………」

重ねてこう云いながら、予は口元に作り笑いを浮かべて、彼の鼻先へ乗り出して行つた。けれども彼は相変らず黙々として、ただ飽くまでも視線を予の方へ注いでいる。そうするうちに、彼の眼球はますます大いさと明るさを増して来て、予の胸の奥の、何かひやりとしたものに触れたようであった。予は何等の理由も予感もなしに、突然かすかな身ぶるいが襲って来るのを覚えた。

とうとうその日は、それきり彼と話をする機会がなかった。予が裏庭から閲覧室へ戻ると、程なく彼も這入って来たが、始終澄まし込んで、無愛想な面つきをしていた。どういうわけで、彼の態度はこんなに急変したのであろう。

予は彼に視詰められた時、何ゆゑ戦慄を感じたのであろう。

——— こういう疑問は当然予の心を囚えたけれども、しかしそれほどいつまでも予を悩ましはしなかった。おそらく彼は、世間によくある気むずかしやの人間で、一日の内に二度も三度も機嫌の変る性分なのに違いない。彼の瞳が予を怯えさせたのは、この頃神経衰弱に罹っている予の感覚

が、たまたま珍しい人種の眼の色に接したためにあり得べからざる幻影を見たに違いない。予はそういう風に簡単に解釈した。

然るに、彼の不機嫌は思いの外長くつづいて、その後毎朝閲覧室で出遇つても、まるきり予の顔を忘れてしまったように、一言の挨拶をもしなかった。今日は機嫌が直るだろう、明日はきつと直るだろう。——予は図書館を往復する道すがら、そういう期待を抱かずにはいられなかったが、一日立ち、二日立つうちに、だんだん望みが絶えて行つて、結局このまま交際が断たれてしまいそうな、覺つかない心地もした。運よく彼と懇意になったのに、雑誌の締切りが近づいて来る結果、折角の話を聞く暇もなく、稿を起こさなければならぬことが、予にはこの上なく口惜しかった。正直を云うと、予はもう大略参考書を調べ終つて、図書館の必要もなくなっているながら、何とかして彼の話を聞きたさに上野へ通っているのであった。そうして、ちょうど四日目の朝になった時、予はぜひとも今日のうちに話を聞くか、或いはあきらめて筆を執るか、いずれかに極めてしまおうと思つた。

その日は、長らく吹きつづいた北風が止んで、今年になつ

て始めての春らしい陽気であつた。小石川の予の家からは、電車の便が悪いので、俥で往くことにしていた予は、団子坂を走らせながら、遙かに上野の森を望むと、其処にはもう、霞が棚引いているのかとさえ訝しまれるほどの、うららかな青空が、暖かそうに晴れ渡っていた。桜木町辺の、新築の家が並んでいる一廓には、ところどころの邸の堀越しに蕾を破った梅の花が真珠のように日に映えていた。予は何となしに、毎季季節の変わり目に感ずるような生き生きとした喜びが、疲れた脳髓に沁み込んで行くのを覺えた。

その喜びは、図書館の前に俥を乗り捨てた後までも、なお暫らくつづいていた。予は威勢よく階段を馳せ上つて、閲覧室へ這入つて行くと、先ず何よりも大きな洋館の窓の外に、紺碧の色に心を惹かれて、一番壁に近い方の空席を占領した。そうして、外から忍び込む爽やかな氣流を深く深く吸いながら、じつと大空を仰いでいると、白い柔かい雲の塊が、巍然として聳え立つ図書館の三階の屋根の上を、緩く絶え間なく越えて行くのであった。予の眼は本を読むことを忘れて、長い間それをうっとり眺めていた。しまいに雲が動かないで、図書館の屋根の方が蒼穹を渡

って行くように見えた。

例の印度人は、大分離れた場所に席を取って、予の方へ背中を向けて、英字新聞の綴じ込みらしいものを余念もなく筆記していたが、やがて、煙草でも喫みなくなったのであろう、ふいと立ち上がって室の外へ姿を消したきり、容易に戻って来なかった。

「——そうだ、きつと裏庭を散歩しているに相違ない。

彼を掴まえるのは今のうちだ。」

こう気がつくと、予は急いで裏庭へ降りて行った。

上野の図書館へ通ったことのある人は、多分知っているだろう。その裏庭は音楽学校に隣接していて、境界の所にささやかな土手が築かれている。予は、とある植え込みの蔭に身を寄せて、忍びやかにあたりを見廻すと、今しも印度人が土手の下に躊躇りつつ、ブライアのパイプから、鮮やかな煙を吐いているのを認めたのである。煙は、まるで粘っこい餡のように、しっとり凝り固まって、真赤な彼の唇を絹糸の如く流れ落ちて、静かな朝の、澄み切った大気の中に浮かんで行った。彼の顔色はこの四五日來の曇りが取れて、絵に画いた達磨のように円々と穏和であった。ちょうどその折、音楽学校の教室の方から、備げに響いて

来る甘い柔らかな唱歌の音につり込まれながら、半ば無意識に爪先で足拍子を踏んでいるのが、機嫌のよい証拠であるように感ぜられた。予はつかつかと彼の傍に姿を現わして、わざと平然たる態度を装い、

「お早う。」

と、快活な調子で云った。

彼は素直に項を擡げて、しげしげと予の額のあたりを注視しているようであったが、晴れやかな眉の間には、見る見るうちに疑り深い表情が色濃く湛えられた。その眼つきの激しい変りかたは、日向ぼっこをしている猫が、物に驚いた時の様子によく似ていた。予は心中に「しまった」と思いつきながら、強いて馴れ馴れしい眸をして、なおも何事かを云おうとすると、あたかもそれを制するが如く、にわかには彼はふうと面を膨らせて徐ろに首を左右に振った。

何という妙な男だろう。何か予に対して感情を害しているのか知らん。——予はいろいろに考えて見たけれど、別段そんな覚えはなかった。むしろ印度という国の不思議さが、この男に乗り移っているような心地がした。予は漠然と、彼の持っている奇怪な性癖が、一般の印度人に共通なものであって、しかもわれわれ日本人の到底理解すること

のできない、心理作用であるかのように想像した。

とにかくにも、その時までわずかに望みを囑^{しよく}していた予の計画は、全然画餅^{がべい}に帰^きしたのである。もうこの上は断念して、明日^{あした}から早速執筆するより仕方がなかった。折角図書館へ来たついでに、参考の足しになりそうな書籍を二三冊^{さん}繰^くいた後、戸外^{ぐわい}へ出たのは日暮れ方の五時過ぎであつたろう。地上の夕闇^{ゆふぐみ}が刻一刻に、舞台の電気仕掛けのように急激に濃^ふくなって、見ているうちに夜に変わろうとする刻限であつた。山下から電車に乗るつもりで、公園の森の中をさまようて行った予は、周囲が暗くなるのではなくて、自分の視力が衰^{うせ}えつつあるような心細さに襲^{おそ}われた。遠くきらきらと瞬^{またた}いている動物園のアーケ燈^{とう}の光を視詰^{みづ}めていると、鬱^{うつ}蒼^{そう}とした園内の樹木の蔭^{かげ}から、丹頂^{たんとう}の鋭^{えい}い啼^なき声^{こゑ}が一二遍聞^{きこ}えて、さながら空谷^{くうこ}に飮^みするのように、反響^{はんきやう}を全山に伝えて行く。予は駱駝^{らくた}のモオニングに厚^うい羅紗^{ろしゃ}の外套^{がいのう}を纏^{まと}うていたが、昼間の温度に引き換えて、冷え冷えとした気流^{きりゅう}の襟^{えり}もとに沁^しみ入るのを覚^{おぼ}えた。今朝家を出る時に、「晩^{ばん}の御飯^{ごはん}には大根^{だいこん}のふろふきを拵^{づな}えましょう。」と云った妻の言葉が想い出されると、急に疲労と空腹を感じて、予の足取りは自^{おのづか}ら速^{はや}くなった。

ふと、自分が今歩^{ある}いている路^{みち}は、上野の公園ではなくて、何処^{どこ}か人里を離れた、深山^{みやま}の奥ではあるまいかというような、取り止めのない考えが朦朧^{もうろう}と予の念頭に浮^うかんだ。現在自分の身辺を包んでいる闇黒^{あんこく}と寂寥^{せきりやう}と、亭々たる無数の大木とは、予にこのような空想を起^{おこ}させるのに十分であつた。予は暗闇^{くらやみ}を辿^{たど}っているうちに、自分の服装や容貌^{ようぼう}までが、全然別箇^{べつこ}の人間に変わっているような気分になつた。自分が今朝、俚^りに乗^のつて出て来た小石川の家や、つい先^{さき}まで本を讀^よんでいた図書館や、そういうものの在^ある世界は、此処^{ここ}から非常に隔^{へだ}たつた、遠いあの世の幻^{まぼろし}であつて、其^そ処^{そこ}へ行けば以前の自分が今頃大根のふろふきを喰^くべているのではなからうか。或いはまた、人間の肉体から魂^{たま}の抜け出すことがあるとしたら、今の自分は魂^{たま}だけになっているのではあるまいか。それとも自分は、現在夢を見ているのだらうか。——予は念のために、今来た路をもう一遍引き返して、図書館の前まで戻^{かへ}つて見ようか知^しらんと思^{おも}つた。いくら戻^{かへ}つても戻^{かへ}つても図書館などはあるはずがないような心地がした。今からわずか十分か十五分の後に、賑^{にぎ}やかな灯^ひの街^{まち}へ出て、電車に乗^のつて、多数の人間と肩^{かた}を擦^{こす}り合^あひながら、小石川の家へ帰^{かへ}ることができるとすれば、